

ユーラシア比較言語学

Eurasian Comparative Linguistics

新 谷 光 二
Koji Atarashiya

ABSTRACT

Theory of Eurasian comparative linguistics is discussed on the basis of sound correspondence between the words of several Indo-European languages and many Asian languages especially Japanese. Previous studies have established that IE /*l-/ , /*g-/ , /*k-/ and /*sk-/ regularly correspond to the Japanese /k-/. Comparing Celtic, Dravidian and Japanese the results of this study leave no doubt that Dravidian and Japanese belong to the Indo-European family.

The Russian *guba* meaning lip is cognate with Lithuanian *lūpa* which is derivative from IE *leb- meaning lip. Thus, the Old Japanese *kaha* and Dravidian *kopli* both meaning lip are also cognate with English *lip*.

The Irish *cobla*, the Dravidian *kupa*, the Mongolian *guba*, the Korean *kop-ta* and the Japanese *kohi* are all derivatives of IE *lebh- meaning love.

Similarly, the Welsh *gadeal* and *gadu*, the French *laisser*, the Dravidian *kali* and the Japanese *karu* are all derivatives of IE *le- meaning to let go.

Links between Japanese and English are clearly shown in the case of the Japanese *kahu* and the English *change*, the Japanese *kara* and the English *scale*, the Japanese *kara-da* and the English *skeleton*, the Japanese *kuha* and the English *scuffle*, the Japanese *katu* and the English *shutter*, the Japanese *kahi* and the English *scoop*. These word couples have the same meanings. In Japanese, /s/ before /k/ of IE-Roots have disappeared entirely in this case.

Key Words: Eurasian comparative linguistics, Indo-European roots, Japanese words.

Celtic words, sound correspondence

I はじめに

日本語の言語系統については諸説があるが、学界で統一された定説は存在しない。即ち未解決の分野である。著者は日本語が印欧語族に属することを既に明らかにしてきた¹⁾。本論文ではその論点を整理し、著者の唱導するユーラ

シア比較言語学の考え方を明らかにする。伝統的な比較言語学的手法に基づく言語系統論成立の決め手は、言語語彙の比較において類似よりもむしろ相違を論じることである。複数の語彙に同一の相違が存在して、その違いに法則性がある時、それらの語彙を同源であるとする証明

力が大きくなる。それはdw-とerk-との対応の如き場合である²⁾。この比較例では、アルメニア語のerk-で始まる意味の異なる三語彙が印欧語根（以下IEと書く）の発達型であるラテン語、ギリシャ語のdw-を語頭にもつそれぞれ異なる意味の三語彙と対応すること（対応する語彙どうしは当然同義語）が明らかになった。この事実に基づいてアルメニア語が印欧語族に属することが決定されたのである。勿論、語彙が同源であるならば多くの類似点が存在する。それらの類似が偶然ではないと言いきれるのはこの例の如く語彙の相違が同源とされた場合である。

語彙には音韻と意味が伴うので、そのどちらをも際限なく変えてしまえば、その比較が無意味になるのは当然である。変化の規則性を論じる場合、意味を固定させて音韻の変化を追求しても良いし、逆に音韻を固定させて意味の変化を追及しても良い。言語は生き物であるので変化するのが当たり前で、音韻も意味も変わらない場合はむしろ稀有である。故に音韻を固定すれば意味が変わるし、意味を固定させれば音韻がずれるのである。よく意味を固定し、音韻の変化を追求するのは、その方が統計的思考に合致しやすいからである。確かに音韻対応法則を確立させるためにはその方が良い。しかし、音韻対応法則が確立されれば、音韻を揃えて意味の変化を追及せざるを得なくなる。計量言語学に基づく安本美典の手法³⁾では意味を揃えるのに対して、大野晋によるタミル語語源説⁴⁾では音韻を揃えているのであって、一方が他方を論難するのは当を得ない。このような論難が生じるのはどちらも証明力のある決め手に欠けるからである。それはどちらも前述のような語彙の著しい特徴ある相違を同源であると論じることができていないからである。

安本の手法に対する著者の批判は月刊「言語」誌上に明らかにした⁵⁾。その要点は、従来の

比較言語学の手法で明らかにされてきた事実が安本の手法では必ずしも明らかにされないと言うことである。安本によれば、例えば同一語族と証明されている英語とラテン語との語彙に関する検定結果では両語が同系とするに足る結果にならなかったと言う⁶⁾。このことはコンピュータに頼るまでもなく、自明のことであった。即ち、安本の手法は「検定結果が同系に有意となった場合はその通りであっても、同系に有意とならなかった場合でも同系ではないと証明されていない」と言うことである。具体的には、日本語とモン・クメール語との相関性は強いと言えても他にそれ以上の相関性の強い言語が存在しないことにはならない。また、日本語とタミル語との相関性は弱いと言っても両者が同系でないとは証明されたわけではない。なお、著者は言語一元論をとるが、安本も基本的には言語一元論をとると言う点では一致している⁶⁾。

ここで、日本語系統論の現状を顧みるとき各研究者が自説に固執するのあまり、他説を非難することに汲々としているのは残念なことである。互いの結果を建設的に矛盾なく再構築する度量が必要である。これがユーラシア比較言語学を唱導する所以である。著者はこのような考えから批判はなしつつも他者の説を好意的に受けとめて、自説を構築してきた。なお、下宮忠雄の説⁷⁾に代表されるような拒絶反応にも著者は回答してきた⁸⁾。ここで最も強調したいことは、日本語語彙とIEとの比較研究に実際に取り組んで欲しいと言うことである。

II 印欧語根の音素/l/

著者の強調する相違点の同源性についてはIEの音素/l/を材料に論じてきた⁹⁾。IEの/l/の諸語派への変化発達を考察することにより日本語の系統も印欧諸語派内の語源不詳語彙の来歴も明らかになることを示した。即ち、IEの/l/と日本語語彙（以下Jpnと書く）の音素/k/と

の間に音韻対応法則が成立すると言う事は
 けっして偶然に生じたものとは認め難く、日本
 語印欧語族論の証明力となった。この事実から
 IEの音素/k/, /kw/, /g/, /gh/, /gw/がJpn
 の音素/k/に規則的に対応するのも偶然ではな
 いとすることができる。しかし、印欧語派内の
 /l/と/k/, /g/との対応は従来確立されてきた
 音韻対応法則から外れているため、多くの比較
 例は存在せず例外的に化石の如く/l/と/g/との
 対応が見出されると考えられる。その例は次ぎ
 の単語家族(word family)の場合である。

IE *leb-² (唇)¹⁰⁾ >
 lip (ゲルマン語派、唇)¹¹⁾
 lūpa (リトニア語、ラトヴィア語、唇)¹¹⁾
 guba (ロシア語、唇)¹¹⁾
 geba (ポーランド語、唇)¹¹⁾
 gubica (クロアチア語、口)¹¹⁾
 gwefus (ウェールズ語、唇)¹¹⁾
 gufle (ウェールズ語、動物の唇)¹¹⁾
 kopli (コラミ語、唇)¹²⁾
 kapa > kaha (Jpn、皮笛¹³⁾ =唇の笛)

従来は、スラヴ語派(ロシア語、ポーランド語、
 クロアチア語など)の語彙guba, geba, gubi-
 caは語源不詳とされている。しかし、バルト語
 派(リトニア語、ラトヴィア語など)のlūpa
 は当然にもlipと同源とされてきた。しかし、
 バルト語派とスラヴ語派は近い存在でありなが
 らlūpaとguba, geba, gubicaは比較検討され
 ていない。この比較は拙論¹⁾において初めて
 可能になった。即ち、/l/:/g/の音韻対応を認
 めるならば、これらの語彙はすべて同源と考え
 られる。そのような視点からすると、ケルト語
 派(ウェールズ語など)の語彙gwefus, gufle
 もドラヴィダ語派(コラミ語など)の語彙kopli、
 日本語の語彙kahaも同源とされる。なお、
 ウェールズ語の語彙gwefusは古期高地ドイツ

語lefs(唇)と同一形式である。IEやスラヴ語、
 日本語には存在しない語中、語尾の/l/, /r/が
 古期高地ドイツ語やケルト語派、ドラヴィダ語
 派、さらに、ラテン語labrum(唇)やイタリ
 ア語labbro(唇)にも共通して存在するのは注
 目に値する。このような語彙の部分微細構造が
 一致することはまた同源の証明力となり得る
 し、語彙の来歴、語史を考察するうえでも力と
 なる。ここにあげる語彙は総て印欧語族に属し、
 IEの*leb-より生じた同源語であると結論され
 る。

また、love(英語、愛)を巡るもので、新例
 を含む以下の語彙がある。

IE *lubh-(関心をもつ、要求する、愛)¹⁰⁾ >
 love(英語、愛)
 cais(アイルランド語、愛)¹¹⁾
 cobla(アイルランド語、愛)¹¹⁾
 cuff(ブルトン語、愛しい)¹¹⁾
 cu(ウェールズ語、愛しい)¹¹⁾
 kupa(カンナダ語、愛しい)¹²⁾
 kavara(タミル語、要求する、性交する)¹²⁾
 kaval(タミル語、興味、注意)¹²⁾
 guba > ʷuwa(モンゴル語、愛しい)¹⁴⁾
 ko:pt'a(朝鮮語、美しい)¹⁵⁾
 koi(朝鮮語、注意して)¹⁵⁾
 kopi > kōhi(Jpn、恋)

ケルト語派(アイルランド語、ブルトン語、
 ウェールズ語など)の語彙cais, cuff, cuは他
 の語源が解かれているが、これは信憑性がな
 い。coblaは全く語源不詳である。従って、こ
 れらは前述のlip(英語、唇)を巡る語彙と同
 様にユーラシア比較言語学の範疇で議論可能で
 あることが理解できよう。ここでも/l/:/g/:/k/=/c/
 の対応が認められる。さらに、ドラヴィダ語派
 (カンナダ語、タミル語など)とケルト語派の
 前述の語中、語尾の音素/l/, /r/がここでも見

られることは拙論の正しさの確証である。モンゴル語と朝鮮語の対応語彙の存在もユーラシア比較言語学には有利な傍証となる。

さらに、今回IEの音素/l/の同様な変化発達の新例として、次ぎの単語家族をあげる。

- IE *led- (離れる) ¹⁰⁾ >
 let (ゲルマン語派、離れる) ¹¹⁾
 gadael (ウェールズ語、離れる) ¹¹⁾
 gadu (ウェールズ語、離れる) ¹¹⁾
 gase (コンウォール語、離れる) ¹¹⁾
 lezel (ブルトン語、離れる) ¹¹⁾
 laisser (フランス語、離れる) ¹¹⁾
 kari (カンナダ語、離れる) ¹²⁾
 karu (Jpn、離る = 離れる) ¹³⁾

この比較例におけるケルト語派(ウェールズ語、コンウォール語、ブルトン語など)の語彙は従来次ぎのように考えられている。lezelはlaisserの借用とされている。gadael、gadu、gasetは同源であろうと考えられながら、他の比較語彙を欠くため語源不祥とされてきた。しかし、著者はこれらの語彙は/l/:/g/の対応から同源であって、語源はIEの*led-であると主張する。ケルト語派内部における/z/:/d/の対応はgwaz (ブルトン語、鷲鳥)とgwydd (ウェールズ語、鷲鳥)に見られるように一般的である。このように印欧語派内の/l/:/g/の対応を考えなければgadaelなどの語源は明らかにならない。

更に、同様の比較例として次ぎの語彙がある。

- IE *lad- (遅い) ¹⁰⁾ >
 *lataz- (ゲルマン語派、遅い) >
 late (英語、遅い) ¹¹⁾
 *lad->kure (Jpn、暮 = 遅い時期)
 *led-to->lussas (ラテン語、疲れた) ¹¹⁾
 *led-to->kuta- (Jpn、くた-びれる、くた-ばる、くた-つ の語根、くた-) ¹⁶⁾

以上の比較語彙四組はいずれの場合もIEの音素/l/の変化発達を論じており、しかも印欧諸語派内とそれを超えたドラヴィダ語やJpnへの発達を同一の音韻対応法則即ち/l/:/g/:/k/のもとに考察している。その上ここで取りあげた語彙「昏」と「愛」、「離れる(暮、くた-びれる)」は意味の上では何の相関も有しない。このように音韻以外には相関のない語彙の比較がまた証明力をもっている。即ち単語家族の比較は任意性の排除には役立つが、言語の意味構造はいかなる言語でもある種の普遍性を有するから、音韻対応の確立には意味構造の相関性のない語彙どうしの比較が要請されるからである。また、ここで見出される音韻対応法則は音声学的にも言語一般通則からも十分説明できるものであることが信憑性を高めている¹¹⁾。

本論文では対応の新例を示し、日本語が印欧語族に属するとする所論を今一度ユーラシア言語学の立場から明らかにした。なお、言語系統の解明には類型論や統語論、諸文法事項の一致、合わせて歴史的、地理的必然性が重要だとする説があるが、やはり決め手は語彙間の音韻対応法則にあることを繰り返して主張したい。

III 印欧語根の音素/k/の前の/s/

語彙間の相違の法則性を決定する場合、特定音素の同一音韻環境における脱落が論じられることがある。一例として、IEの*sn-で始まる語彙はラテン語、ギリシア語、アルメニア語、アルバニア語に発達する過程で規則的に語頭の/s/を失っている¹⁰⁾。このような例は同様に音韻対応の法則として確立される。

IEとJpnの間でこれに似た音韻対応が観察されている。それは*sk-で始まるIEが日本語に発達する場合で、必ず語頭の/s/を脱落させている。以下の語彙群である。理解の助けのため日英両語彙にのみ限って示す。同源の語彙が全く同義であることに注目してほしい。

- IE *skamb- (曲げる) ¹⁰⁾ >
 change (英語、変える)
 kapu > kahu (Jpn、変う)

この場合、英語語彙の語頭に/s/がないのはこの語彙がケルト語系のラテン語に起源をもっているからである。このように語彙にはその語史が現れるものである。

- IE *skel-¹ (切る) ¹⁰⁾ >
 shell, scale (英語、殻、うろこ)
 kara (Jpn、殻)

- IE *skel-⁴ (酒れる、縮む) ¹⁰⁾ >
 skeletos (ギリシャ語、みいら)
 skelton (英語、骨格)
 kara (Jpn、幹=屍) ¹⁶⁾
 kara-da (Jpn、体=屍) ¹⁶⁾

- IE *sheubb- (突く) ¹⁰⁾ >
 shovel, scuffle (英語、シャベル、鍬)
 kupa > kuha (Jpn、鍬)

- IE *skhed-, *sked (裂く、散らす) ¹⁰⁾ >
 shutter (英語、打ち砕く)
 katu (Jpn、搗つ=搗く)

- IE *skep (切る、剃ぐ、切り刻む) ¹⁰⁾ >
 scoop (英語、小スコップ、掏う道具)
 kapi > kahi (Jpn、匙=へら)

- IE *skabh (支える、支持する) ¹⁰⁾ >
 kapi > kahi (Jpn、支=支える)

以上の如き対応の法則性はこじ付けや偶然からはけっして生じるものではない。/l:/k/やこのような音韻対応法則がユーラシア比較言語学、日本語印欧語族論の基礎をなしている。

IV まとめ

ユーラシア比較言語学の考え方はけっして唐突なものではない。「ラルス言語学用語辞典」はフィン・ウゴル語族とアルタイ語族を、日本語や朝鮮語をも含むらしいウラル・アルタイ語族へ統合すること、印欧語族とドラヴィダ語族、フィン・ウゴル語族と統合すること、あるいは印欧語族とセム語族を統合することを魅力ある仕事と考えている¹⁷⁾。ただ、このような考察で有意な研究手法と結果が得られていない故に顧みられないだけである。

最近の比較神話学の成果や次第に明らかにされている有史以前の人類社会に考え及ぶとき、ユーラシア文化の根源はひとつであることが浮き彫りにされつつある。本論文の結果はこれらの考え方を人類言語の面から支持するものである。

Jpnと比較して音韻と語彙が一致する言語圏はケルト語派とドラヴィダ語派であることを示した。これらの言語圏は人類最古の文明である環状列石や環状列木、巨石墓を残した地域と一致する。この事実からすれば原印欧共通基語の年代は少なくとも紀元前5千年頃まで遡ると考えられる。合わせて、アルタイ語族とドラヴィダ語族の共通性があるとするれば、現状比較さるべき言語圏はユーラシア大陸の東西南北の辺境地域である。この現象は言語文明拡散説から支持されるものである。

文献

- 1) 新谷光二 (1979) 「印欧語根と日本語の音韻対応」言語 Vol.8, No.9, p.71; 新谷光二 (1996) 「唇の謎恋の懸け橋」共同文化社 (札幌); 新谷光二 (1999) 「印欧語根と日本語語彙の比較研究」北星女子短大紀要 Vol.35 p.1 等
- 2) A. メイエ、泉井久之助訳 (1997) 「史的言語学における比較の方法」みすず書房 (東

- 京) p.19, p.60
- 3) 安本美典 (1978) 「日本語の誕生」大修館 (東京)
- 4) 大野晋 (1980) 「日本語の成立」中央公論社 (東京)
- 5) 新谷光二 (1979) 「日本語の誕生について」言語 Vol.8, No.1, p.118 ; 「日本語の誕生についてⅡ」言語 Vol.8, No.3, p.122 ; 「英羅二百基礎語彙の比較」言語 Vol.8, No.11, p.128等
- 6) 安本美典 (1981) 面談聴取
- 7) 下宮忠雄 (1981) 「第82回日本言語学会の模様」言語 Vol.10, No.8, p101
- 8) 新谷光二 (1981) 「ユーラシア比較言語学の試み」言語 Vol.10, No.10, p.120
- 9) 新谷光二 (1981) 「ユーラシア比較言語学の試み、皮笛を巡る語源解釈」言語研究 No.80, p132
- 10) W.Morris (1992) *The American Heritage Dictionary of the English Language*, Houghton Mifflin Com. (Boston)
- 11) C.B.Buck (1949) *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Language*, Univ. Chicago Press (Chicago)
- 12) Burrow, Emeneau (1966) *Dravidian Etymological Dictionary* (Oxford)
- 13) 日本大辞典刊行会 (1975) *日本国語大辞典*, 小学館 (東京)
- 14) 小沢重男 (1979) 「日本語の故郷を探る」講談社 (東京)
- 15) 宋枝学 (1960) *朝鮮語小辞典*, 大学書林 (東京)
- 16) 大野晋, 佐竹昭広, 前田金五郎 (1974) 「岩波古語辞典」岩波書店 (東京)
- 17) J. デウボワ, 伊藤晃他訳 (1980) 「ラールス言語学用語辞典」大修館書店 (東京)